

将来への提言

第 19 回インカレ実行委員会

今回のインカレでは、「運営の効率化」をテーマとして、「学生が競技に集中できるよう配慮」しつつ実施しました。ここでは、我々の準備段階からの運営経験に基づき「将来の提言」を述べさせていただきます。

○ 主催者としての学生

実行委員会では、学生が競技者として最善の努力を尽くせるよう、極力運営的な負担を避ける方針でした。大切な直前や当日に運営協力によって競技に向けられるべき時間や集中力をそぎたくないという配慮でした。確かに、直前や当日の総作業量としてはかなり減少したと思いますが、しかし開会式には実行委員会はあまり関与せず事業部（特に京都大学）に負担を強いる形になったなど、若干、方針の統一性には少々疑問が残りました。

そして大会終了後、方針に対する積極的な評価が生まれる一方、突発事項が生じた際の運営のマンパワー不足には学生のカが不可欠だとか、将来卒業した際にかかわるであろうインカレ運営に少しでも参加させることによって意識を高揚させた方がよかったのではないか、そして今回「純粋な競技者」として扱うことによってみなさんが何を得たのかということについて意見が出されました。

ここ数回のインカレにおいて、運営に対する学生のかかわりについて、多様な事例が得られたはずです。語るまでもなくインカレは学生が主役である大会です。そして主催は日本学連という学生自治組織なのです。これは永遠のテーマなのかもしれないが、インカレ運営に学生はどうかかわるべきなのか、実行委員会に対して「今回はこうでありたい」と示せるくらい議論を尽くして欲しいと思います。

○ 地図・コース

今回のインカレでは、調査を外部業者（R.M.O.サービス）に発注したのはリレー（及びモデル）の 3 次調査のみで、その他の調査はすべて実行委員会で行ないました。実行委員会で調査の大部分を行うことは非常に負担になりますが、コースの質を高く保とうとすると、現状ではやむを得ないと言えます。

前年度の日光インカレでは R.M.O.サービスに全面的に発注していますが、（リメイクではあったものの）地図があがってくるのが大変遅く、十分にコースを検討することができなかったようでした。そのためか、コースは極めて簡単なものを感じられました。今回は、新テレインでの実施となったクラシックについて、実行委員会で調査をすべて行ったからこそ「使いたい範囲をすべて地図にする」ことが達成できました。また、コンピュータ作図を取り入れたことにより、調査の途中段階でも出力図という出来上がり地図にかなり近い状態のもので試走等を行うことができました。結果として、特にクラシックでは前年度

とはかなり違った感じの課題を持つコースが提供されましたが（第 19 回実行委員会としては選手権にふさわしいコースが組めたと自負しています）、こうしたコースの品質のばらつきは、選手権としてどの程度まで許容されるのでしょうか。

一方、リレーについてはリメイクでもあったので、業者により 2 次調査以降を発注することを期待していました。しかし、実際には業者の「空き具合」をはかりつつ進めるうちに、2 次調査もほとんど全て実行委員会で行う羽目になってしまいました（本当はクラシックのさらなる精度アップにこの労力を使うはずだったのです）。結局のところ、インカレにふさわしいよりよい地図を作り、よりよいコースを組むためには、完全に業者に任せてはいけな、と実行委員会は判断したのです。R.M.O.サービスが調査に入れたのは年が明けてからで、全調査目数は 15 日にも達しませんでした。

しかし、今回のような地図調査の進め方は、たまたま実行委員会の調査スタッフに恵まれたからできたのであって、毎回のインカレでできるとは思えません。今後インカレが今の地図・コースの質を保ったまま継続していくには相当困難をきわめるでしょう。

ボランティアで調査をするのは限界だから、賃金をはらってやればよいという意見もありますが、かならずしもそうとは言えないのではないのでしょうか。実際には、[1] インカレで求められる質の調査ができる人が少ない（特に若い世代が少ない）、[2] 社会人や院生はあくまでも本職が優先されるため、いくらお金がもらえるからといって無限に時間がとれるわけでは決してない、という要素があるためです。

今回はなんとか乗り切ったものの、将来へ向けてどうすべきかという提言は思いつかない、というのが正直なところです。しかし、そろそろ本気で考えなければならぬぞ、とだけは間違いなく言うことができます。

○ 参加料・宿泊等について

インカレが他の大会と最も異なる部分は「宿泊・輸送」が運営に含まれることです。ふだんの大会では考えられない苦勞が伴います。扱い金額が大きく危険であること、大会直前にキャンセルの連絡が増え、運営負担が大きくなるというのがその最たるものです。これらを全て旅行代理店にお願いした結果、入金チェック、宿割り、キャンセル手続き等を全て旅行代理店の業務（実行委員会が行えばボランティア）として行っていただけなので、その効果は絶大でした。また、初めて輸送費についてもキャンセルが可能となったので、キャンセルした人には従来よりも返金額が大きかったはずで、このことはよくよく考えれば当然のことなので、今後のスタンダードとして欲しいと思います。

参加費については「できるだけ安価な参加費で」というのが我々の大きな目標でした。

結果的には前年と同じ 3 万円ということになりました。実行委員会では 2 万 9 千円でできるであろうという見通しを持ってはいましたが、その妥当性については終わってみるまで見当がつかえません。赤字にならないことが運営の絶対の条件なだけに、安全策をとって 3 万円となりました。

大会会計は終了していませんが、ある程度の黒字を残すことができたことは確実なようです。今回は細部にわたって支出項目を経理コード別に集計しており、電子データの形で今後の資料として残すことができそうです。

○ 運営の効率化について

私たち実行委員会は電子メールを情報媒体の一つとして用いました。電子メールが読めない人のケアを十分おこなうこと、極めて大切な連絡は書面で行うこと、セキュリティーに留意すること、などが課題として残りましたが、今後極めて有効なコミュニケーション手段となるでしょう。また切手代・コピー代などの事務費用はおそらく激減する事ができたはずです。従来ほとんど役員の自腹となっていたと思われる電話代も減らすことができたと思われます。参考までに、商用ネットに加入している人には電話代や接続料は請求ベースで支払ったことを記しておきます。

効率化という点で言えば、前年までの資料の引継は重要です。中でも運営マニュアルはもちろんのこと、要項（含プログラム）・申込書の様式については最も重要です。特に後者は学連がある程度定型化し、電子ファイルの形態で所有しておけば、その都度その都度実行委員会が頭を悩ませる必要がなくなると思います。また申込者もミスが減少すると思われます。

今回、次回の常磐インカレのスタッフが視察に訪れ、希望する部分を自由に見学してもらいました。また、さらにその次の山口インカレのスタッフが運営に加わっていました。適切な引継が今後も行われることを希望します。